

海外事情研究所主催・高大連携事業

東京外国語大学 夏期世界史セミナー —世界史の最前線V—

東京外国語大学では、本学の世界各地域の歴史学担当スタッフによる最新の研究成果を公開するとともに、高校で世界史教育を担当する先生の方々との対話を通じて世界史教育に新たな視座を示すことを目標に、今年度も2日間のセミナーを実施します。今年は1日目に入試説明会、2日目の昼休みに意見交換会を設けます。日頃の皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2013年7月30日(火)～31日(水) 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 227(予定)

プログラム ※今後の調整によって、多少、変更になる可能性もありますので、ご了承ください。

1 日 目	30日(火)	9:00～9:30	受付
		9:30～9:40	海外事情研究所所長挨拶(吉田ゆり子)
		9:40～10:40	「中世ヨーロッパにおける普遍公会議の機能」(千葉敏之)
		10:40～11:00	質疑応答
		11:00～11:10	休憩
		11:10～12:10	「戦間期日本における都市と農村—『生活』という視座から」(野本京子)
		12:10～13:30	昼休み
		13:30～14:30	「ベトナム人兵士の目線から見たベトナム戦争—オーラル・ヒストリーの可能性を探る」(今井昭夫)
		14:30～14:50	質疑応答
		14:50～15:10	休憩
		15:10～16:10	入試説明会
2 日 目	31日(水)	09:00～09:30	受付
		09:30～10:30	「アメリカ・プリマス起源の神話構築」(金井光太郎)
		10:30～10:50	質疑応答
		10:50～11:10	休憩
		11:10～12:10	「まっすぐな国境線と地域間紛争—植民地統治にみる西アフリカの事例から—」(坂井真紀子)
		12:10～12:30	質疑応答
		12:30～14:00	質疑応答昼休み意見交換会・懇親会(学生会館ホール)
		14:30～15:30	「「テロとの戦い」を通じた「民主化」か、「民主化」という名の「テロ」拡散か? : 2000年以降のアラブ世界における政治変動を読み解く」(青山弘之)
		15:30～15:50	質疑応答

参加条件・申込み方法等

日程 2013年7月30日(火)、31日(水)

2日間

会場 東京外国語大学 府中キャンパス
(東京都府中市朝日町 3-11-1)
西武多摩川線「多磨」駅より
徒歩5分、
又は京王線「飛田給」よりバス

対象 高等学校、
予備校の世界史担当教員

受付期間 2013年7月16日(火)まで

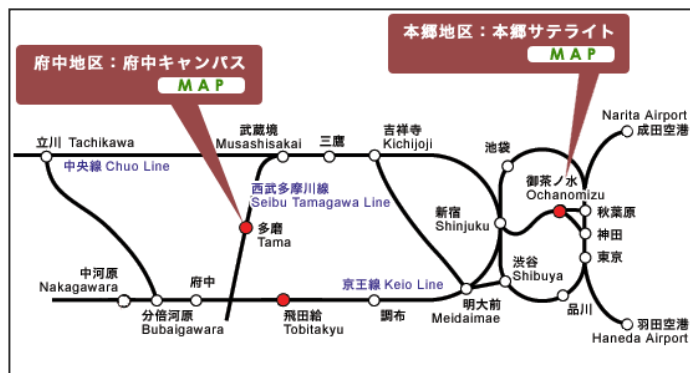
受講料 無料

懇親会 無料

応募方法 同封しました申込書をFAXにてお送り
ください。

同じ高校で複数の方が申し込まれる
場合は、申込書をコピーして
ご利用ください。

なお、宿泊が必要な方は、事前に宿泊
先を確保した上でお申し込みください。



[お申込み先]

東京外国語大学 戦略支援室

〒183-8534

東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL:042-330-5158

FAX:042-330-5155

[お問い合わせ]

吉田ゆり子(海外事情研究所所長)

ifa@tufs.ac.jp

[企画・運営]

東京外国語大学 海外事情研究所

<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

プログラム 1 日目

千葉敏之「中世ヨーロッパにおける普遍公会議の機能」

ヨーロッパ文明の特質の一つに、集会的社会というものがある。むろん、いかなる文明、いかなる政治体制下でも、議会等の集会在、君主や首長の統治と被統治者である臣民の利害とを調整するなどの重要な役割を果たしてきた。ヨーロッパでは、古代ゲルマン社会の「戦士の集会」、古代ローマの元老院制度などを継承しつつ、身分制議会という固有の政治制度が発展した。この世俗的議会の発展は、中世においてはつねに、聖職者の参集する地方教会会議、教皇が召集する公会議、さらには「全地の聖職者」が召集される普遍公会議、という教会的会議体の発展と平行的な関係にあった。この集会の二元性こそが、ヨーロッパ社会の本質であったといえる。

この講義では、中世ヨーロッパに特有の普遍公会議に焦点を当て、上記のような集会の多元的システムのなかで普遍公会議が果たした役割を、初期キリスト教時代から、1439年のフェラーラ＝フィレンツェ公会議まで、時代ごとに分析していく。

野本京子「戦間期日本における都市と農村—『生活』という視座から」

第一次大戦中の都市への人口集中がもたらす「都市化」の進展は、生活という局面においては科学的・合理的な「能率重視」の生活をめざすという考え方をともなっていた。いいかえれば、産業化だけではなく、生活レベルでの近代化が問われるようになったのである。1920年に文部省の外郭団体である生活改善同盟会が設立されるが、指導者の目線は欧米諸国を意識しつつ、第一次大戦後の日本（とりわけ都市）の生活様式や生活態度といった家庭生活の改善を射程に入れたものであった。一方農村においては、都市の「文化生活」に対して、農村の独自性にもとづいた生活改善という主張が展開される。本講義では、1920年代以降の生活改善運動において、欧米諸国に比肩する（すべき）生活文化の担い手としてどのような階層が想定されていたのか、また都市と農村とが対比的・対抗的に論じられるにいたった背景とその意味について、「生活」「生活水準」をキーワードとして論じていきたい。

今井昭夫「ベトナム人兵士の目線から見たベトナム戦争

ーオーラル・ヒストリーの可能性を探る」

ベトナム戦争は冷戦下の20世紀後半における最大の「ホット・ウォー」の一つであり、アジアの民族解放闘争を象徴する出来事でした。この戦争はベトナムでは「抗米救国抗戦」と呼ばれているように、アメリカ合衆国が大きくコミットした戦争でした。米軍の介入過程や撤退後のアメリカ社会に見られた「ベトナム・シンドローム」について、私達は『ベスト&ブライテスト』などの書籍や「地獄の黙示録」、「ディアハンター」等のアメリカ映画などにより、ある程度知っています。一方、ベトナム人から見たベトナム戦争像については、ほとんど知らないといっても過言ではないでしょう。本報告では、私が2005年から始めた、ベトナム国内の退役軍人等への20回近くの聞き取り調査をもとに、ベトナム人兵士の目線から見たベトナム戦争像の粗描を試みるとともに、ベトナム戦争研究におけるオーラル・ヒストリーの可能性と「戦争の記憶」についてお話しいたします。また平和学習の題材としてベトナム戦争がどのようなことを提供しうるのかについても、受講者の皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

プログラム 2 日目

金井光太郎「アメリカ・プリマス起源の神話構築」

アメリカ合衆国の起源はいつどこでしょうか。教科書にあります。1607 年ジェームズ・タウンです。これには明らかに先住民やスペイン人の活動を排除するバイアスがあります。しかし、その点を別としても、1620 年プリマスもアメリカの起源とされます。ピルグリム・ファーザーといわれる入植者こそ、自由を求めて新天地を開拓するアメリカ人の原点とされています。彼らの逸話は、感謝祭を始めとして大いに神話化されています。むしろ、本当の「アメリカ」はプリマスに始まるとイメージするのではないのでしょうか。しかしながら、そのイメージは奴隷制と対抗する「自由」の政治文化の中で構築されたのであり、その抗争の頂点である南北戦争において完成しました。リンカーンは感謝祭をアメリカの国民的な祝日と規定し、プリマスの経験こそが自由を求めて移民を選択した人々による理念の共和国、アメリカを象徴するものとしたのでした。この時初めて自由と並んで平等理念がアメリカ的原理に組み込まれたのでした。他方、「移民の国、アメリカ」はアフリカ系の経験をアメリカ性から排除することになりました。

坂井 真紀子

「まっすぐな国境線と地域間紛争～植民地統治にみる西アフリカの事例から～」

アフリカの自然は多岐にわたる。砂漠やサバンナ、森林といった異なった自然環境の影響のもと、現在もさまざまな形態の社会が存在している。植民地時代以前には、イスラム化した中央集権的な帝国や王国が覇権を争う一方で、定住しない遊牧民コミュニティがサハラ砂漠を移動する社会があった。また自然信仰によってゆるい共同体を維持する“無頭社会”も農耕民コミュニティによくみられる社会形態であった。だが、19 世紀後半に行われたヨーロッパ列強によるアフリカ大陸分割によって、こうした複数の社会は一つの地域にまとめられ植民地統治されることとなった。人工的な直線で囲われた地域は、やがてヨーロッパ型の「近代国家」として独立していくことになるが、その統治は社会構造の多様さゆえに困難を極めている。本発表では、現在もアフリカ各地に内在する地域間紛争の原因を、ヨーロッパ列強による植民地統治時代にさかのぼって考察する。

青山弘之

「テロとの戦い」を通じた「民主化」か、「民主化」という名の「テロ」拡散か？：

2000 年以降のアラブ世界における政治変動を読み解く」

チュニジアでの政権崩壊（2011 年）を機にアラブ世界全土で高揚した「アラブの春」は、当初は「独裁政権」に対する「民衆革命」と捉えられ、体制転換後には「民主化」が実現すると夢想された。しかし、その後の現実を目を向けると、こうした予定調和を辿った国はなく、そのいずれもが内政麻痺、国家破綻、内戦、さらには「サラフィー主義者」、「ジハード主義者」などと称される過激な集団の台頭といった危機に直面している。

アラブ世界において、「民主化」と「テロ」はどのように結びついているのか？ 本報告では、「テロとの戦い」と「中東民主化構想」といった論理のもとで推し進められたイラク戦争（2003 年）、レバノン「杉の木革命」後の欧米諸国によるシリア・バッシング（2005 年）、そして「アラブの春」とその後の各国の混乱に着目し、アラブ世界の「民主化」に隠された危険性を明らかにする。